

# 自分の研究をふりかえって

大 矢 繁 夫

## 1

私は2016年3月に退職しました。大学院を終え、自立した研究者としてスタートを切った助手時代から数えると、38年の研究生生活を過ごしたことになります。そのうち小樽商科大学では、21年を送ることができました。本学の教育・研究の質の良さについては、多くの人が語るところであり、その点は私も同様なのですが、私の場合、意識するわけではないのですが、自然と前任の大学と比較してしまいます。その比較を詳しくは述べませんが、小樽商科大学には何よりも、国立大学としての諸々の長所とともに百年の歴史が醸し出す思想的雰囲気、心的態度のようなものがある、と感じてきました。入学してくる学生の質や研究を大事にする大学の基本的姿勢は、時代がどうであれ維持され続け、私自身は、教育・研究の環境として申し分のない場が与えられてきた、と思っています。

この度、『商學討究』に小文を書く機会が与えられました。ありがたいことと思い、自分の備忘録の意味合いも込めまして、これまでの自分の研究を振り返り、主要な研究テーマ・論点や得ることのできた知見などを整理しておくこととしました。

## 2

私の主要な研究テーマはドイツの銀行に関するものでした。ドイツの大銀行は、ドイツ銀行Deutsche Bankが誕生する19世紀後半から第2次大戦を経て現代に至るまで、強力な経済的機能を有し、しばしば国境も越えて支配的な力(「権

力」Macht)を振るいました。この力の源は、銀行本体が商業銀行（日本では普通銀行）の業務のみならず証券会社の業務も営むことができた、という点にありました。つまり、ドイツの大銀行は、日本のいまの銀行などと異なり、銀行でもあり証券会社でもあった、ということなのです。ドイツの大銀行のこのような実体が、産業社会や国家に対して、ひととき強い影響力を発揮したわけです。

私の研究関心は、ドイツ大銀行のこの「権力」のファクターをより立ち入って分析したい、というものでした。このようにして研究をスタートさせたのですが、私が最初に赴任した大学では「証券論」という講義科目を担当したこともあり、上記したドイツ大銀行が発揮する力のファクターのうち、大銀行の証券関連業務に当面する研究の焦点を当てることとなりました。他方、小樽商科大学へ転任すると「銀行論」を担当することとなり、今度は研究の焦点がドイツ大銀行の商業銀行機能の方へごく自然に移行していきました。

### 3

前任大学の時代、ドイツ大銀行の「権力」ファクターとして、まず証券関連業務を対象としたのですが、その中でもとりわけ「証券信用業務」の意義に着目し、その仕組みを明らかにするとともに、この業務が、銀行の「権力」行使の背後にあって、それを支えるシステムとして働く、という点を掴まえることができました。さらに研究は広がっていましたが、ここでは省略します。

銀行の「権力」行使の2つめのファクターとして焦点を当てたのは、ドイツの大銀行の商業銀行業務でした。以下、ポイントとなる点を記しておきます。通常、商業銀行ないし普通銀行は、その特性を示す固有業務として、預金、貸出、為替の3業務が挙げられます。この3業務を統合的にとらえて商業銀行の本質的機能を掴まえようとする、結論だけを示しますが、次のようになります。「短期の預金を吸収し、それを支払い準備としつつ、貸出を自己宛債務・預金設定の形をもってなす。そしてこのことは、銀行自身が有する為替業務・振替決済システムを用いて顧客の支払い決済を処理することによって可能と

なっている」と。結局、商業銀行の機能は、振替決済システムを前提に、信用創造・預金創造によって貸出能力を発揮する、ということなのです。通常よくいわれる「金融仲介機能」も、この信用創造・預金創造による貸出ということのうちに包摂して整理できます。「金融仲介」分は、信用創造・預金創造分のうち、預金全額が流出する分ということになります。

ドイツの大銀行は、このような商業銀行機能を強化し、すなわち、振替決済システムと信用創造による貸出を強化し、産業への強い影響力・「権力」を行使していったのです。また、このようなドイツの大銀行の活動が、国境を越えて他のヨーロッパ諸国に拡大していったとき、それはマルク建ての国際決済システム、すなわち「マルク圏」の形成として、歴史上何度か現れることとなりました。この点も把握でき、研究が進みました。これも大きな論点でした。

#### 4

以上は、ドイツの大銀行の「権力」行使の2つめのファクターを、商業銀行機能のうちに把握しようとしたということですが、これに関連して、商業銀行・普通銀行が必然的にもつことになる重要な特質が浮かび上がってきました。それは、商業銀行が表裏一体的にもつことになる「強み」と「弱み」という論点でした。

「強み」は、信用創造によって貸出を増大できるという面ですが、しかしそれは同時に、自己宛債務・預金をも増大させます。銀行は、B/Sの両側を膨張させるのです。そして、増大した貸出・資産が不良資産であったり、バブル資産のように価値の裏づけが希薄な「架空性」の強いものであったとき、その場合、この資産をもって、同時に増大した預金の払い戻し殺到には応じえない、という事態が発生することがあります。信用創造による貸出等の資産増大は、どうしても劣化していく資産を抱え込まざるを得ない、ということでもあります。劣化するか否かは、事後的に判明するからです。劣化していく資産は「架空性」が強いものだったのであり、これをもって、銀行に対する信用不安・預金払い戻しの殺到には応じえない、ということなのです。

繰り返しになりますが、信用創造によって銀行は、B/Sの両側を膨らませることとなるが、それは銀行の「強み」の発揮であると同時に「弱み」を抱え込むことにもなる、ということです。信用創造という商業銀行の本質的機能に、いわば必然的に、そして表裏一体的に伴う「強み」と「弱み」という問題です。

さらに、以上のことから要請とされてくるのは、銀行自身による貸出等資産増大に対する事前的で厳格な審査であり、そして、金融当局による、銀行が劣化する資産を抱え込むことを前提にした事後的な対応の準備、ということになります。

また、このように商業銀行の「強み・弱み」という特質を理解すると、銀行監督を担う金融当局が銀行資産のリスクに対して時として緩くなったり、逆に規制や指導を強めたりという、一貫性に欠けるように見える姿勢に対しても理解ができます。同様に、国際的なBIS規制に対しても、銀行の活動を抑制すると懸念されたり、逆にもっと厳しい規制が求められる、という状況も理解できることになります。銀行の「強み」をより発揮させようとするのか、それとも「弱み」の進行を防ごうとするのか、2つの局面と立場があるということです。

## 5

以上で述べてきたような研究のほかに、私は、2つの地方銀行の年史執筆に関わりました。銀行のトップや中堅の行員から現場の業務等の話を聞く機会が与えられ、得難い研究上の経験ができたと思っています。2つの地方銀行とは、福岡市に本店をもつ西日本銀行(現在は西日本シティ銀行)と北海道銀行です。前者は1995年に『西日本銀行五十年史』を、後者は2011年に『北海道銀行六十年史』を発行しました。

西日本銀行の年史では、研究者ばかり15人ほどが全体を分担して執筆しました。北海道銀行の年史では、研究者は私1人であり、私の担当は、同行自体の歴史部分ではなく、直近30年間の日本及び北海道の経済・金融状況でした。

西日本銀行の年史に関わり、強く印象に残っているのは次の点でした。同行は、相互銀行のトップバンクとして、他の相互銀行に先駆けて1984年に単独で

普通銀行転換を果たしました。当時、この転換から10年ほどしか経てない時期だったので、普銀転換に対するトップバンクとしての誇りが同行内部に満ちていて、ひととき活気があったように感じた、という点です。

また、同行は、CSR（企業の社会的責任）などが一般に成熟した概念になっていなかった時期に、本業の銀行業務のほかに、社会的・地域的貢献活動に大きな力を注いでいました。この活動は、「長い目で見たとき、自行の利益につながってくる」という位置づけかと思われましたが、同行の長期的視点を強く感じました。

北海道銀行の年史に関しては、執筆に携わる以前に、同行の初代頭取であった島本融氏の著書『銀行生誕』（2006年復刻版、初版1956年）を読む機会があり、同書には地方銀行の使命感や矜持のようなものが語られていたと感じていました。また私は、島本氏が大蔵省の役人時代にドイツへ留学し、その研究成果を他者との共著で発刊した『独逸金融組織論』（有斐閣 1935年）という文献を読んでいたこともあり、これらのことから、島本氏が礎を築いた北海道銀行の年史の仕事には親近感をもって臨むことができました。

## 6

振り返ってみますと、私の研究は、銀行の機能や社会的役割を改めて自分なりに考えてきた、ということになります。銀行は、繰り返しになりますが、信用創造によって預金通貨を創り、同時にそれを企業・産業に貸し出します。これを通じて銀行は、企業・産業の動向や発展を直接にリードする、という役割を担います。銀行は私企業とはいえ、公共的性格の強い経済インフラとしての役割を色濃くもつわけです。

現在、銀行は、日銀当座預金の一部にマイナス金利を適用されるなど、その収益基盤が打撃を受けています。しかし、既述のように、銀行の機能・経済的役割は、預金・貸出・為替の3業務を併せもつ銀行以外によっては果されえないものです。経済インフラとして他者には代替されえない、地域企業・産業のリーダーとしての銀行は、今後どのような道を切り開いていくのか、期待をもつ

て注視していきたいと思っています。

小樽商科大学の良さは、どの大学にも当てはまるのかもしれませんが、教員は研究に立ち向かい、得られた知見をもって教育し、これを通じて若い学生諸君をしっかりと見識もつ“大人”に育て・送り出す、という営みを百年を越えて為してきた、という点にあります。私は、この大学に勤めることができ、心から幸せだったと思っています。私の在職中に関わりをもって下さった教職員、学生の皆さんに深く感謝申し上げます。